

## 西高卓球部の思い出

四期生 藤田 元嗣

幹事の吉田君から電話を戴き、原稿を書いてくれということだった。日頃、忙しさにまぎれて、あまり連絡もせず、先輩、後輩の諸兄弟姉に御無沙汰をしている罪滅ぼしの気持ちとなつたし、早速、筆をとった。

私は、昭和二十四年に当時の十高に入學し、以後三年間、卓球部にお世話になった。この間、二年生のとき、中田さん、田中さん、荻村さんにつづいてたしか四代目と思うが、キャプテン（部長ではない。当時、部長は先生だった）をやらせて戴いた。もつとも、私の場合は、他のキャプテンの方々と違って、NO. 1プレーヤーというわけではなく、チームメートには、荻村さん、市川さん、亀田君等の名手が現役でいたから雑用係みたいなもので、チームをまとめるといったような苦労は何もしなかった。一番一生懸命やったのは、体育館を共同で使っているバレー部、バスケット部と交渉していかに多くの練習時間を確保するかということだった。しかし、私にとって、西高卓球部のレギュラーであり、

キャプテンだったということは、誇りを持った思い出であり、卒業のとき記念に戴いた卓球部のバックルは、〇〇賞とか、××大学のものなど全然顧みず、つい最近まで愛用していた。

思い出せばきりが無いが、その後、大学、社会人と経験しても、一時期にあればひとつのことに集中したことはそんなに多くはなかったように思う。そのような雰囲気から、荻村さんのような世界的名選手が生まれたのだろうが、今の若い人達には、我々の時代と違い、面白いレジャーが沢山ありすぎる。こういう誘惑を振り切って自分を鍛練するのは我々の時代よりもっと難かしいかも知れない。西高卓球部の伝統をより輝かしいものにするためには、このような点が課題になるのだろう。

設備の点でも、現在では想像できないかも知れないが、体育館のできる前は特にひどいものだった。破れ教室に卓球台をおいただけで、照明はもちろんなし、そういう所で周囲が暗くなり、白球が見えなくなるまで練習した。また、練習できる台があると聞いて、はるばるよその学校まで出かけた。そういうときに、よく荻村さんにつき合わされ、土地の与太者に因縁をつけられて、二人で逃げ帰った思い出もある。

その頃の出来事は日誌に克明に書いてあり、大学ノートに何冊もある筈だが、いまはどうなっているだろうか、特に荻

村さんは筆まめで、何でも日誌に書いた。ある日、日誌を開いて見ると、自分のことが『あの野郎、なまいきだ』などと書いてある。何とかやつつけてやりたかったが、筆でも到底、荻村さんに太刀打ちできなかった。

今まで、大学や仕事の上で、いろいろな知り合いを持ったが、西高卓球部で知り合った人達が、一番心おきなく、なつかしく、二十数年会わなくても、会えばたちまち昔の友達にもどってかざり気のない話ができるのは、うれしいことである。昨年の秋にも、かつてのチームメートである大橋君に再会し、ゴルフを教えていただいた。

また、同じく原田君などは、少年時代からの厚かましさが、年と共にみがかかかって来た感じであるが、どういう因縁か、ここ数年の雀友、ゴルフで、親しくおつき合ひして戴いている。

社会に出てからの友達は、何かしら利害や競合の関係があるって、会えば心の安まるという友達はなかなかできないものだ。そういう意味でも、西高卓球部の三年間は私にとって人生の中で、実に貴重な時代であった。今の現役の人達にも、是非、こういう時期を大切にしてもらいたいと思う。

## 西高時代の思い出

五期生 久保田 四郎

国際的なスポーツとして、檜舞台におどり出た昨今と違って、昭和二十六年頃の私が在学していた頃は、終戦後の混乱期を脱せず、経済的にはきびしい時代であって、とても世界に歩を進めることのできない状態であった。然し、国内にあってはアメリカ進駐軍のもたらした功罪の功であろうか。活発な活動が続いていたし、我々の耳にも関大の藤井という名前（後にプロに転向）は未だに残っている。高校界に於いては、レベルの高かった東京地区で、西高の名前などは出る幕もなかった。

先日、世界一の対決と見られる日ソ女子バレーボール戦の手に汗にぎる熱戦と、必死の応援をテレビの画面に見て、久し振りに興奮したものだ。同時に、二十数年前の東京地区優勝の興奮を再現した感があった。

参加選手全員の必死の、声の枯れんばかりの応援、熱戦好プレイから産み出す波打つ感動、それにも勝る母校愛、勝ち取った優勝の喜び、まざまざと頭の中に浮かんで来る。

当時、東京地区には菓麗なフォームと確実な攻め着実な守